

《研究ノート》

家庭婦人バレーボールにおける参加動機に 関する一考察

大原奈緒美

Consideration about the participating motive in married woman volleyball

Naomi OHARA

キーワード：家庭婦人バレーボール，参加動機，コミュニティ

Key Words：Married woman volleyball, Participating motive, Community

1. 研究の目的

わが国でのスポーツ活動の拠点は、スポーツ少年団や教育機関を中心とする運動部活動、または企業が抱える運動部活動といったように、教育現場と企業などの「運動部」を中心として、これまで発展を遂げて来た。そして、これらのスポーツ活動は、勝つ事を最大の目的とする勝利至上主義中心におこなわれてきた。この勝利至上主義の考え方は、勝つことが最優先であり、練習場所等の確保はその目的を達成するために非常に重要である。

今日では、教育現場や企業でのスポーツ活動の場が十分に確保され、昔と比べて活動の場が充実しており、その成果も確実に向上してきている。しかしながら、一方では「運動部」を引退することで、スポーツ活動の場を失うといった問題が生じるようになってきている。

このような状況を踏まえ、わが国のスポーツ

政策では、生涯にわたってスポーツができる環境、生涯スポーツ社会実現に向けた取り組みが急務とされている。その中で、文部科学省（以下、文科省）が2000年に策定したスポーツ振興基本計画では、総合型地域スポーツクラブを市区町村に1つは設立し、このクラブを拠点とした生涯スポーツ社会実現に向けた方策実現を図っている。また、2010年に発表されたスポーツ立国戦略では、高齢者の孤独死といった無縁社会の問題を解決する為、総合型地域スポーツクラブを拠点に地域でのコミュニティ形成に努めている。これまで「運動部」の活動のみでは、規律を守るうえでの上下関係によって、コミュニティの形成は難しかったが、このように、総合型地域スポーツクラブにおいて、子どもから高齢者まで幅広い世代が関わりを持つことによって、地域でのコミュニティが形成され、生涯にわたってスポーツがおこなえる環境を構築することが可能となった。

さらに文科省は、2012年に策定されたスポーツ基本計画の中で、目指すべき具体的な社会像として次の5つを掲げている。

- ①青少年が健全に育ち、他者との協同や公正さと規律を重んじる社会
- ②健康で活力に満ちた長寿社会
- ③地域の人々の主体的な協働により、深い絆で結ばれた一体感や活力がある地域社会
- ④国民が自国に誇りを持ち、経済的に発展し、活力ある社会
- ⑤平和と友好に貢献し、国際的に信頼され、尊敬される国

これは、次代を担う青少年が他者との協働と規律を学びつつ育成され、地域に深い絆が存在し、健康な長寿を享受できる社会。国際的にも尊敬される国（持続的発展が可能な社会）を目指しているということである¹⁾。

これらのことを考えるうえで、「世界でも他に類が無く、特異な活動とその意義をもつ（内海2005）」家庭婦人バレーボールに着目していきたい。何故なら、家庭婦人バレーボールの活動は、大会において優勝チームを創らない大会運営をおこなったり、全国大会に1度出場したら再度出場することができないといった、独自のルールを採用し様々な世代がチームを編成し試合を行い発展を遂げて来た。さらに、レクリエーションスポーツの要素を取り入れながら、競技性も高めて、多くの参加者がいつまでもプレーができる工夫を行っている。この状況を鑑みた時に、まさにわが国が目指す生涯にわたってスポーツができる環境といってもよいといえるからだ。

以上のことから、本研究では家庭婦人バレーボールの発展を整理し、そこに参加する人々の動機をまとめる。これを踏まえて、総合型地域

スポーツクラブが担う、生涯スポーツ社会の実現と地域コミュニティ形成にむけた取り組みへの考察を加える。

2. バレーボールの誕生

バレーボールは、YMCAの体育指導者であったW.G.モルガンが、テニスのボレーにヒントを得て、1895年アメリカのマサチューセッツ州にて考案された。

老若男女問わず楽しめるスポーツとして考案されたバレーボールは、当時アメリカで流行っていたアメリカンフットボール、野球、バスケットとは違い、レクリエーションとしての要素が多く含まれていた。また、バレーボールの1つの特徴として、ネットを挟むことで身体接触が減り、安全かつ同時に多人数で試合をすることができ、さらに、道具も他のスポーツよりも少なく済んだため、経済的であった。

このようなことから、バレーボールはレクリエーションスポーツとしての広がりを見せ、1908年東京YMCA体育主事となった大森兵蔵によって、日本に導入された。その後、協力主事のF・Hブラウンが日本に派遣され、さらなる普及に努めた。

バレーボールの楽しみ方として、当初アメリカでは1チーム6人制、ローテーションの導入が定着していたが、アジアに伝達されたバレーボールは、フィリピンで1チーム16~20名でポジションは固定し、ネットに打ち込んだボールはもう1度プレーできるなど、アメリカとは異なるルールに発展し、1913年に開催された第1回極東オリンピックでは16人制で行われた²⁾。その後、改良を重ね16人制から12人制を経て、9人制バレーボールが確立され、現在に至る。

1964年に開催された東京オリンピックでは、6人制バレーボールが正式種目となり、当時「東洋の魔女」として世界中から注目を浴びていた日本女子バレーボールチームは、その期待を裏切ることなく、見事に金メダルを獲得した。この頃、日本国内では9人制バレーボールの普及が進んでいたが、オリンピックの影響もありその後、6人制の普及が進んでいくことになる。

今では、バレーボールと言えば「6人制」というイメージが強く、6人制が普及する以前から、日本で親しまれていた9人制バレーボールの認識は、若者を中心に薄いように感じられる。しかしながら、9人制バレーボールを現在も盛んに行っているのは、日本だけである。基本的なルールは6人制と変わりはないが、その技術的・戦術的な特徴は、9人の選手がそれぞれの役割を分担し、レシーバーはレシーブ、アタッカーはアタックをとといったように専門のポジションで活躍することにより、身長の高い選手だけでなく、低い選手にも活躍の場があり、その総合力が勝敗を決める。また、ネット・プレーでの技術の差が攻撃の幅につながるなど、高レベルの技術が要求されるため、日本のバレーボール界では技術は9人制バレーボールのほうが上だとの意見も聞かれる³⁾。

3. 家庭婦人バレーボール

家庭婦人バレーボールとは、“ママさんバレー”と呼ばれることもあり、6人制と9人制の両方が存在するが、その活動や大会は9人制であることが多い。1964年に開催された東京オリンピックをきっかけとして、全国的にバレーボールへの人気が高まり、女性のスポーツ参加要求の増大があった。その中で、主婦層への反

響も大きく、家庭がある主婦までもがバレーボールを日常的に楽しむようになっていった。

そして、1970年代の高度経済成長による主婦層の余暇時間の増加により、PTAの交流行事や地域自治体の体育祭などを通じ、全国に普及するとともに、1968年、東京都家庭婦人バレーボール連盟が設立され、1970年に第1回全国家庭婦人バレーボール大会が東京駒沢体育館で開催された。

この家庭婦人バレーボールは、その名の通り主婦の参加が多く、子ども連れで参加できるスポーツである。また、家庭婦人バレーボールは、レクリエーションスポーツとしての要素も大きく、幅広い年齢層が無理なく続けることができるスポーツとして普及している。

各大会は、勝敗ではなく健康の保持・増進を目的として開催されており、50歳以上限定の「いそじ大会」や60歳以上限定の「ことぶき大会」などのカテゴリーも存在する。また、大会の特徴として、チャンピオンを創らない、全国大会には一度出たら再度プレーヤーとしては出られない、全国大会の参加資格は25歳以上（Vリーグ等の大会出場経験者は35歳以上）などがあり、大会によっては既婚者のみが対象となる大会もある。

このように、家庭婦人バレーボールは独自のルールの中で今日まで発展を遂げてきたが、これに対し内海（2005）は、「全国家庭婦人バレーボール連盟の活動は、世界でも他に類が無く、その特異な活動とその持つ意義についての社会科学的な検討は、現代社会の解明の手掛かりとなる。家庭婦人バレーボールに関する研究はこれまで殆ど皆無であり、スポーツ社会学の大きなテーマとして注目される必要がある。」⁴⁾としている。

その一方で、大衆化と高度化の矛盾を挙げ「スポーツ普及の上で、これは単一のクラブ、チームレベルに於いても、全国的組織に於いても抱える必然的な矛盾であり、その統一的な発展が求められる。」⁵⁾とし、レクリエーションとしての要素が強かった家庭婦人バレーボールも、スポーツの競技性という本質上、高度化が不可避であることを述べている。

これは、時代の変化とともに家庭婦人にも変化があり、さらに、家庭婦人バレーボールへ参加するメンバーの目的も変わってきているということが言える。例として、現在、茨城県で活動しているKチーム（9人制クラブバレーボールチーム）は、18～40歳までのメンバーで構成されており、学生や主婦など様々な職種のメンバーが所属している。練習は、毎週土曜日の19時～22時の週1回だが、全国大会出場を目的としている。このチームには家庭婦人バレーボールチームとしての意識はないが、パートで子どもがいる主婦も所属しており、先に述べたような矛盾を常に抱えながら活動している。また、家庭婦人バレーボールの活動にも参加しているメンバーがいるが、表向きは「楽しくやりましょう」としつつも、実際は「勝ちたい」という矛盾との葛藤がある。

このように、家庭婦人とクラブの掛け持ち所属をしているメンバーがいることで、それぞれの競技の矛盾を感じたり、家庭婦人バレーボールの本来の目的に反し「勝ちたい」という気持ちを強く持つてしまうことによる葛藤などが、家庭婦人とクラブのチーム間で混在しているなどといった問題点も少なくない。

6人制バレーボールの強化を大々的におこなっている今日のバレーボール界で、これまでバレーボール界の根底を支えてきたと言っても

過言ではない家庭婦人バレーボールの問題解決は、わが国が掲げるスポーツ政策を考えるうえでも、非常に重要だと考える。

4. 参加動機とコミュニティー形成

林ら⁶⁾が、家庭婦人バレーボール参加者を対象として行った調査によると、参加動機として一番多かった回答は、「PTAの活動」であった。それに次いで、「友達に誘われて」や「地域の友達を誘い合って」という回答が多かった。活動の目的としては、「楽しむのため」という回答が一番多く、その他は「健康・体力作り」や「仲間作り」であった。さらに、活動を継続して得られたメリットとしては、「良い友達が得られた」、「ストレスが解消した」、「健康・体力作り」、「生きがいが得られた」という回答が多かった。さらに、「これらの生涯スポーツ活動は、社会活動への参加の1つでもあり、特に女性にとっては身近にある社会進出の機会であることも今回の調査結果は示している。」とし、「スポーツ活動を通して、仲間作り、友達作り、地域での情報交換などを実践しており、社会活動としても有効であることが示された。」としている。

この調査結果から、家庭婦人バレーボールをおこなうことで得られる効果や期待は大きいとともに、家庭婦人バレーボールが生涯スポーツとしての役割を担いつつ、コミュニティーの形成にも寄与しているということが言える。

5. 考察

先に述べたように、家庭婦人バレーボールは生涯スポーツとしての役割を担うことができる

スポーツであり、そこから得られる効果としてコミュニティ形成に寄与しているということが言える。

しかし、その一方で時代の変化とともに、家庭婦人バレーボールの競技性にも変化が見られ、本来の大会や活動の目的であった「楽しむ」ことや「健康の保持・増進」の趣旨が、「勝つこと」に変わりつつあるのではないかということが示唆された。また、それ以外にも時代の変化とともに、家庭婦人バレーボールが内包する課題や問題が深刻化しつつある。

独自のルールで発展を遂げてきた家庭婦人バレーボールだが、わが国が掲げるスポーツ政策と照らし合わせつつ、再度、そのあり方や発展の方向性について検討する必要があるのではないだろうか。

6. 今後の展望

今回は、先行研究や参考文献をもとに、わが国のスポーツ政策と家庭婦人バレーボールの現象をまとめることに留まった。

今後は、過去の調査結果を参考に、現在の家

庭婦人バレーボールの現状について調査していきたい。主な内容としては、茨城県家庭婦人バレーボール連盟に登録しているチームを対象に、アンケート調査をおこない、その結果をもとに過去と現在の家庭婦人バレーボールへの参加動機の比較、コミュニティ形成の寄与についてまとめ、わが国のスポーツ政策、特に生涯スポーツについての一考察をまとめていきたいと考える。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省ホームページ：<http://www.mext.go.jp/>
- 2) 山岸紀郎ほか「詳解9人制バレーボールのルールと審判法 [2002]」財団法人日本バレーボール協会審判規則委員会：vii, 2002
- 3) 山岸紀郎ほか「詳解9人制バレーボールのルールと審判法 [2002]」財団法人日本バレーボール協会審判規則委員会：viii, 2002
- 4) 内海和雄「日本のスポーツ・フォー・オール—未熟な福祉国家のスポーツ政策—」不昧堂：P.356, 2005
- 5) 内海和雄：「日本のスポーツ・フォー・オール—未熟な福祉国家のスポーツ政策—」不昧堂：P.367, 2005
- 6) 林喜美子ほか「家庭婦人が生涯スポーツ活動に長年に渡って参加できる要因」和洋女子大学紀要, 家政系編：34, 61-78, 1994